
2. 環境と共生のまち＝早稲田 いのちのまちづくり

環境と共生のまち＝早稲田 いのちのまちづくり実行委員会
(東京都新宿区)

Ⅰ. 活動の背景と目的

早稲田大学周辺地区は東京の都心部、山手線の内側に存する住商混在地域であり、早稲田大学のひざもとに位置している。近年東京都心部の空洞化が問題となっているが、人口は西早稲田1～3丁目では、バブル期以後も微増（平成2年及び7年国勢調査）している。

早稲田大学は「門のない大学」として知られ、文字どおり大学とまちの一体化した地域である。学生を対象とした小売・飲食店が多数立地し、特有の賑わいがあるまち＝カルチャータンである。しかし近年地域の高齢化、商店街の停滞、特に後継者不足なども懸念されている。まちが抱えている問題は1つではない。環境、福祉、教育など、あらゆる分野が複雑にからみあっている。それが現在は相互に悪影響を及ぼしあって、複合地域問題化が深刻化しているといえる。それらに同時に取り組まなければ、結局どの問題も解決していかない。

そこで異なる分野から同時にアプローチすることで、まちづくりの波及効果を高め、効果的に資源をマネジメントすることを考えた。他分野での取り組みを個々に進めつつ相互に触発、連携させる広義での「循環型社会づくり」をめざし、その基盤づくりに取り組んだ。具体的にはイベント「エコ・サマー・フェスティバル・イン・早稲田」「たんけんたい」等のワークショップ実験を随時開催し、他分野連携の社会実験を重ねた。さらにそれを弾みとして、他分野連携のまちづくりの仕組みづくりを模索し、中心市街地の持続可能な活性化を目指すことを目的とした。

Ⅱ. 活動の内容

異分野が連携する体制づくりを平時に構築することは困難をとまなう。平素は様々な拘束要因が個々の分野で少ないためである。あえて実験的にチャレンジ精神をもって、本来あるべき連携あるいは循環型社会を構想して、それを思い切って試行しながら新しい仕組みづくりの「機会の窓」を開くための努力が必要である。そのためには、平素より異分野との交流、議論を深めつつ、連携モデルとして社会実験を共同でおこなうことが有益である。

このような問題意識から「早稲田いのちのまちづくり実行委員会」が平成8年12月に発足した。メンバーは、商店主、早稲田の住民、早稲田大学の教授、学生、企業、マスコミなど多様である。

現在では、①リサイクル、②バリアフリー、③震災対策、④情報（インターネット）、⑤地域教育、⑥零細小売活性化（元気なお店）の6つの分科会に分けて活動を行いつつ、共同での地域連携の可能性を模索している。助成を受けた活動は以下の5つである。

第一は、「エコ・サマー・フェスティバル・イン・早稲田」の開催である。これはすべての部会の連携を試行する1日の社会実験である。平成9年8月23日（土）におこなった。第二は、「ちびっこ探検隊」の実施である。これは地域教育部会を切り口にリサイクル部会

や震災対策部会に連携の窓を開く活動である。第三は、「わせボラ97」の開催である。これは、同じく、地域教育部会からのアプローチであるが、大学生が対象で、バリアフリー部会と連携を模索する意義をもつ。第四は、「リサイクルステーション」の市場調査である。これはリサイクル（環境）部会から、地域教育と零細小売活性化（元気なお店）への波及を目指している。第五は、これらの基盤となるwwwページ、メーリングリストの基盤整備と運営である。個々の分科会があえて同じメーリングリストで日常議論を行うことで、その連携を平素より模索する。

そしてこれらを行政主導でもなく、大学や企業が主催したわけでもなく、すべてまちの「手作り」で行った。まちが「場」をつくり、そこに大学、行政、企業が参加する形式とした。

1) 「エコ・サマー・フェスティバル・イン・早稲田」

①きっかけ

大学の周辺商店街は毎年いわゆる「夏枯れ」があり、人口、活気、経済等、様々な面から地域の空洞化を乗り切らなければならない。夏中店を閉めてしまう店舗も存在する。しかも通常の商店街より利潤を追求することは難しく、それが年間を通じて経済循環を促進しない理由となっている。それが住宅、土地利用の更新を停滞させ、地域の活力を減退させる要因となっている。

そこで夏にイベントを行い、1年での人の循環リズムを変えていくことを試みた。平成7年度から開催しており、出発時の基本テーマはエコロジーであった、当時は「エコといえればみんなが来るぞ」という意識がきっかけとなったが、助成を受けた今年はやや広義に「エコ」を解釈し、イベント名称のタイトルは変えないものの、循環しあうことに複合的に取り組むこととした。

②主催等

主催は、早稲田大学周辺連合会（早稲田グランド商店街、早稲田商店会、大隈通り商店会、早大西門体育館通り商店会、早大南門通り商店会、早稲田駅前通り商店会、グリーンベルト鶴巻商栄会）である。後援は、新宿区と早稲田大学である。また協力は早稲田いのちのまちづくり実行委員会、東京都新宿東商店会、新宿西商店清掃事務所、西早稲田連合商店会、自治体学会である。



エコ・サマー・フェスタでのフリーマーケット

③内容

開催は、平成9年8月23日（土）午後1時～9時であった。以下の9の催しから構成された。それぞれの分科会（部会）が単体あるいは他の部会と共同で、さらに他の部会や一般市民へ情報発信をワークショップ型（専門家と参加者の共働）で、行っているのが特色である。

- ・早稲田実業高校ブラスバンド部の演奏（地域教育部会から）
- ・エコ・フォーラムの開催（リサイクル部会＋震災対策部会から）パネラー6名
- ・震災体験地震車の設置（震災対策部会＋地域教育部会から）
- ・地元消防団と大学消防団の共同訓練（震災対策部会＋地域教育部会から）

- ・インターネット体験コーナー設置（情報部会＋地域教育部会から）
- ・フリーマーケット（零細商店街部会＋地域教育部会から）
- ・奥会津特産ハーブの産地直販（零細商店街部会＋リサイクル部会から）
- ・チビッコ車椅子体験（バリアフリー部会＋地域教育部会から）
- ・夕涼みコンサートの実施（すべての部会で）

2) 「ちびっこ・たんけんたい」

①きっかけ

子供が遊んだり、買い物をしたりする場所を、さらに自分達のまち「早稲田」として知るために企画された。この「たんけんたい」は、子供と子供、大人と大人、子供と大人、今まで会ったことになかった人同士が知り合いになり、まちの中に新たな絆が生まれることを願った。

②主催等

「宝をさがせ！たんけんたい」実行委員会（「いのちのまちづくり」の福祉部会と有志）

③内容

第1回は「マンホールたんけんたい(97.2.11)」で、様々なマンホールを探しながら防災問題を考えることを狙いとした。第2回は「春をさがすたんけんたい(97.4.5)」で、早稲田のまちの問題を解いていくオリエンテーリング方式とした。第3回は「ここはどこだ？たんけんたい」で、早稲田の写真を取め、子供に配り、地区の景観ポイントを発見・確認してきてもらうこととした。

第4回の「宝をさがせ！たんけんたい(97.10.19)」では、「宝さがし」をモチーフに、問題を解きながら最終地点へたどり着くロールプレイングのあるゲームとした。地図と問題用紙を配付した（問題例：「大学の建物は歴史があり古い。車椅子の乙武お兄さんは階段が苦手。大学が相談してスロープにしてくれたところがある。どこだ？」等）。宝物を無事手に入れ、1時間半ほどで子供は戻ってきた。最後に地元の戸塚第一小学校の教室でまとめ（まちの観察の確認作業）をした。



メンバーの乙武君（早大学生）

3) いのちのイベントウイーク「わせボラ'97」

①きっかけ

現在、早稲田大学及び周辺地区は大学の福祉実践型ボランティア・サークルにかなりの比重を負っている。しかしその活動にも自ずと限界もあり、より多くの社会参加で地域福祉の負担を分担する仕組みの構築が求められている。そこでボランティア活動を行う早大生学生が一同に集い、各々行っている様々な活動から「いのち」について考える催しを開催した。

②主催

「わせボラ'97」実行委員会（介護、手話、福祉系サークルの有志）、早稲田周辺商店連合会

③内容

開催は12月15日（月）、16（火）の2日であった。以下の11の催しから構成した。

- ・車椅子体験
- ・視聴覚障害体験
- ・日本赤十字協会+盲導犬デモンストレーション
- ・福祉系サークルのブース展示
- ・シンポジウム「有償介護ボランティアの現状」
- ・講演会 河合純一君（早稲田大学教育学部4年・パラリンピック水泳金メダリスト）
- ・パネルディスカッション「地域社会でのボランティア活動」パネラー5名
- ・岩国哲人氏（前出雲市市長）講演会
- ・リサイクルマーケット
- ・手話劇
- ・映画「どんぐりの家」上映会

4) 「リサイクルステーション」の市場調査

①仕組み

以下のようなプログラムを仮定した。商店街がエコステーションをつくる（1番、2番と波及）、エコステーションには空き缶のバーコード読みとり装置付き「ラッキーリサイクル回収機」を設置する。回収した空き缶・ペットボトルはエコステーションが、地域の回収業者と契約してリサイクルする。参加商店街の店、自動販売機は1本20円のデポジットを上乗せして、販売する。空き缶をエコステーションの「ラッキーデポジット回収機」にバーコードを読ませて投入すると、5缶に1回の確立で「ラッキーデポジット券」が当たる。

これらの仕組みが機能するかを調査することとした。

②実験及び調査主体

「循環型まちづくり推進協議会」（いのちのまちづくりのリサイクル部門と有志）が設置し、早稲田大学社会科学部早田研究室が現実性調査を行うこととした。

③内容

大学生他の飲料缶の利用状況、ゴミの集配に関する規範、地域の範囲や規模について明確な基準を模索することが課題である。現在継続調査中である。

5) WWW ページ、メーリングリストの基盤整備と運営

現在、1日10～20のメールがメーリングリスト上で交わされている。メンバーは店主、早稲田の住民、早稲田大学の教授、学生、企業、マスコミなど多様である。近年は地方都市で早稲田のまちづくりの動きを知って興味を持ったメンバーや慶応大学の教員、学生なども参加している。

III. 活動の効果と今後の課題

活動の効果は具体的には以下の点である。



エコ・サマー・フェスタでの消防訓練

①多分野共通の資源活用体制の可能性

高齢者と地域が馴染みになることは「福祉」「防災」等の観点からも「商店街の顧客確保」「高齢者の生活基盤安定」等、どちらのサイドからも意義があることが、両者にとって理解されてきた。その結果、積極的な対話が様々な箇所で開催されるようになり、高齢者とのふれあい、馴染みであることを大切にするようになった。

②ビジネスとチャリティの融合

その結果、福祉、中小企業経営いずれに固有な習慣や発想が転換を迫られることになった。「わせボラ」ではボランティア系福祉サークルと営利追求団体である商店街が連携してフリーマーケットを開催し、飲食店舗の出店が実現した。このような実験から、まちの中で営利と非営利活動の差と連携効果が実践を通じて理解・定着してきた。そのためサークル、市民団体などの専門性を高め、一方でコスト意識をはぐくむことに寄与している。一方商店街は非営利活動のもつ地域密着型の「ホスピタリティ」から見習う点が多かった。

③世代間の対話の促進

ボランティアスタッフの多くは大学生であり、一方で商店街や教員が継続して世代を越えて接触し続けることで、世代間の対話が可能になった。その結果、学生が生き生きと社会実験に動ける体制をまちが用意し、一方、まちが活気づくことに学生が積極的に参加し体験学習する循環サイクルができつつある。

④大学（理論）と商店街（実践）の共働体制づくり

周辺住民は大学の中で話し合われている新しい学説や論理などと触れるチャンスができ、常に新しいまちづくりを試みるためのいわば専属シンクタンク的な機能を確保することができた。一方、行政や大学は新しい理論や試みの実験し検証するサイクルを確保することができるようになった。

⑤組織連携型防災体制づくりの萌芽

こうした機運から、実際に政策レベルの萌芽がいくつかある。例えば、大学と地域それぞれの防災組織が連携して「エコ・サマー・フェスタ」で訓練を開催することができた。その結果、大学との共存を政策レベルで再検討する機運が高まり、地域安全・危機管理の体制に関する総合的な見直しを行うこととなった。

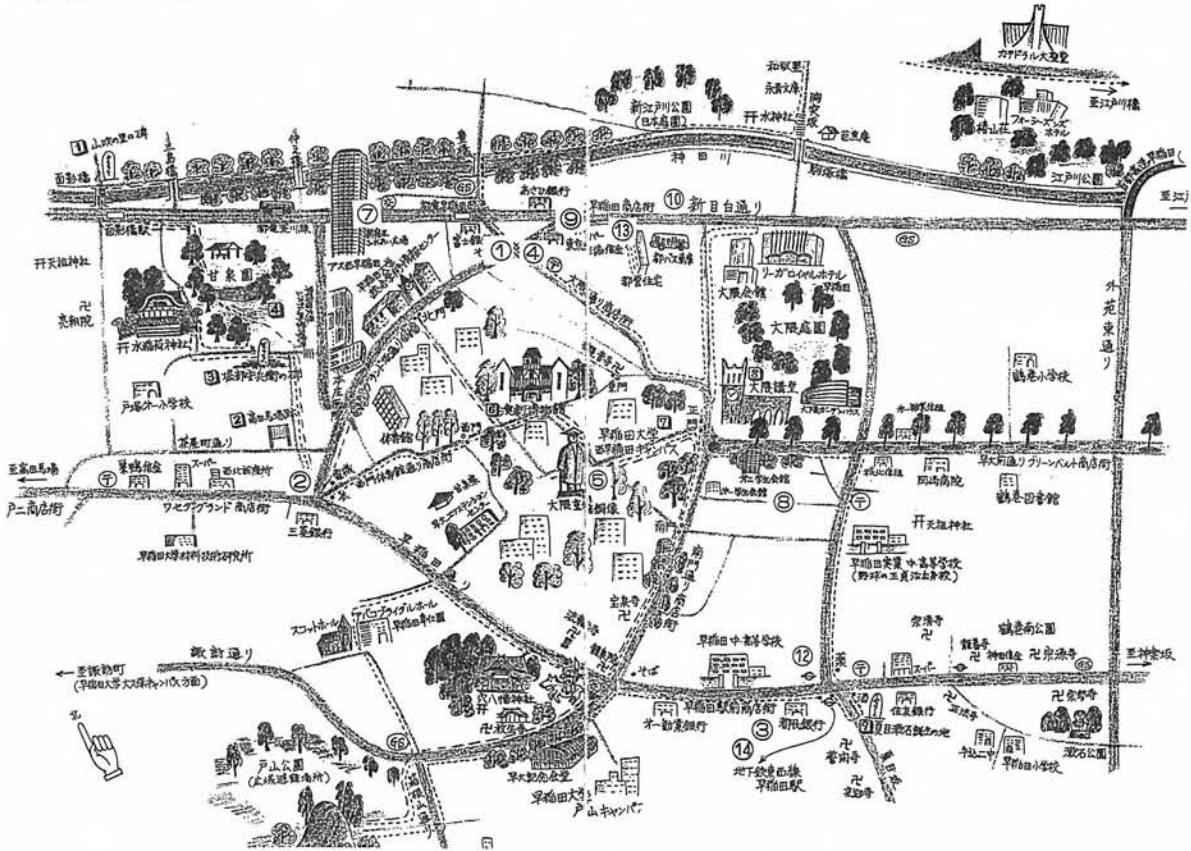
⑥誘い水としての助成金の可能性

まちづくりの助成組織（インターメディアリー）からの補助金は、昨今の経済情勢から乏しく、まちづくり団体が個々単独で十分な活動を推進できないケースがある。しかし異分野の活動が連携しあうことで、補助金などをより有効に活用することができるようになった。例えば「わせボラ」での講演会とフリーマーケットの開催は、イベントの集客を左右する重要な催しであったが、福祉系サークルのみでは限界があり、商店街とそのノウハウの集積が活用することによってわずかな資金源を有効に生かした企画にすることができた。助成金だけでコトおこしをする発想よりも、それを誘い水として、人や組織が集まり、その団結力でコトを成し遂げるタイプの活動が動き始めたといえる。

IV. まとめと展望

「いのちのまちづくり」は今後もイベント型の社会実験である「エコ・サマー・フェスタ」を開催していただろう。しかしそのテーマは年々移り変わっていく。また、ここでの実験の好感触と培った異分野間の連携による連帯感、信頼感をもとに、政策レベルでの検討が本格化しつつあり、ちょうど転換点を迎える時期といえる。また、まちづくり会社の法人格

取得も検討されてよい。現在検討されているデポジット調査の結果などからも、より事業を指向する継続的なまちづくり活動に転換していく兆しが見えている。機会があったらまた報告したい。



早稲田大学周辺